

第2章

実践報告

渡辺 武志・西川 陽子

第1節 SSHニューヨーク研修

2014年12月13日から21日まで、校長、教員2名と生徒10名で、アメリカのBARD高校との交流を目的としてアメリカのニューヨークを訪問した。NY到着後、ホストファミリーとの顔合わせを行い、翌日はNY市内を散策した。15日からは学校がはじまった。訪れた学校はBARD high schoolで、高校と大学の教養課程を学ぶことができる学校である。建物は100年の歴史があるが、元は小学校であった。

BARD校の生徒の生活の様子と本校の生徒の様子の大きな違いは、

1. 授業は基本的にディスカッション形式であること
2. 授業に関して、生徒の授業に対する集中力が日本の生徒より高いこと。
3. 放課後の部活動は存在しないことである。

1. については日本でも導入されつつある。文化の違いもあると思われるが、生徒が躊躇なく自然に質問し、能動的な学びにつながっている。2. についてはアメリカでは家庭教師は存在するが、塾は存在しない。そのため、学ぶ場所は事実上学校のみであり、これも授業での集中力につながっている。3. については教員は日本のように、学校が丸抱えで放課後も生徒の面倒をみない。教員は4時以降、生徒がだれもいなくなり、教師もいなくなる学校が不思議に感じた。

生徒はそれぞれのホームステイ先から学校に通い、授業を受けていた。また、17日にはアメリカ自然史博物館にいき、博物館の研究員ノアさんから鳥やその研究に関するお話をしていただいた。

その後、資料保存庫や実験室なども見学し、膨大な量の標本が保存されていた。また、一般の展示は生物の進化の歴史を中心とした様々な内容のものがあつた。

また、翌日はメモリアルスローンケタリング癌センターを訪れT細胞や腫瘍、寿命についての講義の後、研究施設を案内していただいた。世界最大であり、かつ最も古い研究施設とあり膨大な量の資料や機材が所狭しと並んでいた。

そして17日の午後には日本文化の紹介をし、18日にはそれぞれのプロジェクトの発表を行った。

日本文化の紹介は自分の国であるが、紹介することが



難しいようであったが、うまく交流をしていた。

また、主目的である研究発表はホームステイ先や学生との交流によって、予想していたよりも英語による発表が大変スムーズに行われた。生徒たちは、言語による交流の大切さの重要性を力強く感じ、文化の違いに強い印象をもったようであった。

(文責 渡辺武志)

13 (土)	NY到着
14 (日)	NY巡り
15 (月)	学校
16 (火)	自由の女神
17 (水)	アメリカ自然史博物館
18 (木)	がんセンター&日本文化紹介
19 (金)	学校&SSHプロジェクト発表
20 (土)	終日自由行動
21 (日)	帰路



分数関数の授業（数学）



SSHプロジェクト発表（粘菌）



SSHプロジェクト（色素）



日本文化紹介

第2節 モンゴル研修報告

1. 目的

附属学校モンゴル研修は今年で3回目となる。このモンゴル研修の目的は、生徒レベル・教員レベル、教育学部レベルとレベルごとの目的がある。まず生徒レベルとしては「新モンゴル高等学校の生徒と月1回CALEでTV会議をしている生徒が、モンゴルに実際に赴き、新モンゴル高校の生徒と交流を図る。」である。教員レベルは、「新モンゴル高等学校の教員との交流を通して、学校レベルでの交流を促進する。」であり、教育学部レベルとしては、「学部ミッションの再定義にかかわり学部の国際化が大学から求められている。附属が実施しているモンゴル国際交流を学部と一体となっていくことで附属と学部の連携、及び学部の国際化に寄与する。」ことが目的である。

2. 日程

今年度の研修は平成24年7月24日(木)～8月3日(日)の10泊11日で行われた。参加生徒は8名、引率教員は3名である。生徒募集は、2013年度学びの杜「地球市民学」をとっている生徒からモンゴルの高校生とのTV会議を希望する生徒を募集し、9月から毎月1回のTV会議を新モンゴル高等学校の生徒と実施した。研修の事前学習としては、

- ①モンゴル大使城所大使の講演(2月12日)
- ②モンゴル国立教育大学オドゲレル先生の講義(4月23日)
- ③モンゴル語入門講座(7月7日～11日)を行った。

(日程)

日付	予定	宿泊先
7月24日(木) (1日目)	6:40: 中部国際空港 名鉄改札口 9:00: 中部国際空港発 (CA160 3h30m) 11:35: 北京国際空港着 15:10: 北京国際空港発 (CA0955 1h50m) 17:30: ウランバートル空港着 銀行で円→トゥグルクへ換金(1万円程度)	ホテル泊(ミシェールホテル)
7月25日(金) (2日目)	朝食: ホテル 6:20: ホテルロビー集合 6:30: ダシンチレンへ移動(車約3時間) 10:30: ダシンチレン到着 村のナーダム祭典開会式見学 13:00: 昼食(ツーリストキャンプ ザーンブラザ) 14:00: ナーダム見学 モンゴルスモウ 16:30: ホームステイ先へ移動 星空を楽しむ	ダシンチレンでホームステイ(引率者はツーリストキャンプ泊)
7月26日(土) (3日目)	朝食 10:00: ダシンチレン学校訪問 12:30: 昼食 15:00: 村の高校と一緒にスポーツ大会等 16:30: 村調査 15km離れたところにある博物館見学 19:00: ホームステイ先へ移動	ダシンチレンでゲホームステイ(引率者はツーリストキャンプ泊)
7月27日(日) (4日目)	朝食 8:30: カラコルムへ出発 昼食: ハンタイジュキャンプ 12:30: カラコルム到着 カラコルム博物館見学、亀石見学 19:00: 夕食 ダシンチレン村調査のまとめ、新モンゴル高校での発表準備	ブルドツーリストキャンプ泊
7月28日(月) (5日目)	8:00: 朝食 エルデニゾー博物館見学 13:00: 昼食(アルタイツーリストキャンプ) 砂漠砂丘見学 17:00: ラクダ、乗馬体験 20:30: ホルホグ体験 22:00: 各ゲルへホームステイ	ブルドゲルステイ(引率者はツーリストキャンプ泊)
7月29日(火) (6日目)	ゴビ砂漠での朝日を楽しむ 9:00: 各ゲルへお迎え サンサル村へ移動 サンサル村調査、サンサル村学校訪問 13:00: 昼食(移動中のレストラン) 14:00: ウランバートルへ移動 20:00: ウランバートル市内で夕食	ホテル泊(ミシェールホテル)
7月30日(水) (7日目)	朝食: ホテル 9:00: ホテル出発 9:05: モンゴル科学技術大学鉱物博物館 10:30: JICA訪問 12:00: 新モンゴル高校到着 昼食 歓迎会(日本紹介含む) ディスカッション ホストファミリーと合流	※ホームステイ泊(引率者はミシェールホテル)

7月31日(木) (8日目)	朝食: 生徒はホームステイ先、引率者はホテル 9:00: 新モンゴル高校集合 10:30: 日本大使館(林参事官) 13:30: 日本法センター訪問 15:30: フィールドリサーチセンター 16:30: 新モンゴル高校到着 ホストファミリーと合流	※ホームステイ泊(引率者はミシェールホテル)
8月1日(金) (9日目)	朝食: 生徒はホームステイ先、引率者はホテル 9:00: 新モンゴル高校集合 ウランバートル市内 ゲル地区 日本人墓地 午後: 新モンゴル高校(高3授業「考える日本語」参加) 16:00: ホストファミリーと合流	※ホームステイ泊(引率者はミシェールホテル)
8月2日(土) (10日目)	朝食: 生徒はホームステイ先、引率者はホテル 午前: 新モンゴル高校生と一緒に河川敷清掃 午後: ホストファミリーと過ごす 16:00: 新モンゴル高校集合 民族舞踊見学(18:00～19:00)	ホテル泊(ミシェールホテル)
8月3日(日) (11日目)	8:00 ミシェールホテル出発 9:00 ウランバートル空港集合(ミシェールホテルからバス) 11:50 ウランバートル(CA0902) 14:00 北京国際空港着 17:00 北京国際空港発(CA159)セントレアへ 21:00 中部国際空港着 解散式後に解散(お迎えをお願いします)	

3. 研修に参加した生徒の研修参加目的

- ・この研修に対し、「発展途上国の現状を知る」「異文化に触れる」という2点を目的として参加した。自分の将来の夢の1つに「途上国の開発に携わる」というものがあり、それについて何か刺激やヒントをえて、今後の学習や進路に影響があることを期待した。
- ・異文化に触れてみたいという気持ちがあったこと。将来に結びつくような何かを見つけないとすることがありました。日本ばかりにいないで外の国のことも知って、自分の視野を広げたかった。
- ・モンゴルでは、発展しているウランバートルとその他の地域の比較やどんな技術がモンゴルにはあるのかを特に見ようと思っていた。



(ダシンチレン村のナーダム①)



(ダシンチレン村のナーダム②)



(新モンゴル高等学校の外観)

4. ダシンチレン村のナーダム

(生徒の感想より)

- ・開会式では踊っている人、乗馬をしている人などみなデールという民族衣装を着ていて綺麗だなと感じた。
- ・みんな民族衣装を着て、歌ったり、踊ったり、馬の乗ったり、演奏していたりした。その中でも私は、馬に乗りながら歌っていることに一番の驚きをもった。
- ・ナーダムでは、相撲・弓・競馬の3種目が行われ、私たちはモンゴル相撲を見ました。日本の相撲とは全く違い、土俵がないのでどちらかが倒れないと終わりません。迫力があって見ていて楽しかったです。

5. 新モンゴル高等学校との交流

(生徒の感想より)

- ・新モンゴル高校の授業は日本語で行われており、どの生徒も日本語が話せることにとても驚いた。環境問題、社会問題などの知識や考え方もしっかりしていて将来のビジョンもしっかりと持っている生徒はかりだったので、同じ高校生として私もしかくりしようという自覚が芽生えた。
- ・新モンゴル高校の校長先生のお話しには感動しました。モンゴルの人なんて心がきれいなんだろうと思っただし、みんなと友達になりたいと強く思いました。
- ・私たちが行った日本についてもプレゼンも緊張せずに行うことができ、上手くできました。慣れたのかもしれませんが。

今日は新モンゴル高校の生徒と一緒に河川敷の清掃を行いました。セレブ川に行く途中多くのゴミがありました。河川敷には、ビン、ペットボトルなど目につくような大きなゴミがたくさんあり、拾うのがたいへんでした。

- ・新モンゴルの生徒と一緒に河川敷のゴミ拾いをしました。そこへ向かう道のりもとても汚かった。今までモンゴルでのごみ問題について考えてきた私にとってとてもよい経験になった。ごみ問題に対する教育はどうあるべきか日本に帰ってきたらしかくりと考えたい。



(モンゴルの生徒と一緒にセルベ川の掃除)

6. モンゴル研修について生徒の感想

- ・このモンゴル研修では多くの方にお世話になりました。また、モンゴル人は一人ひとりがぶれない「自分」を持っていて、日本人とは違うなと思いました。この研修を通して「絶対に強い意志を持てる人になろう！」と決意することができました。
- ・モンゴルを誤解している部分が日本に多いと思ったので、日本とモンゴルの首脳会談によって、結びつきが強くなったモンゴルのことを私たちはもっと知るべきだと思う。
- ・私は、モンゴルと日本の良好な関係を保つために、よりよくするためにどんなことができるのか、どんなことをしていくべきなのかをしっかりと考えていこうと思う。
- ・私は、物理を勉強し、物理と密接に関係するような仕事に就きたいと思っていたが、ウランバートルや田舎を見て、自分がこれから学ぼうとしていることが意外なところで役に立つかもしれないと感じた。

7. 次年度モンゴルへ行く後輩に向けてのアドバイス (今年度の生徒から)

- ・モンゴルはすごくいい所。11日間なんてあっという間に終わっちゃうから悔いなくすごして欲しい。事前にモンゴルのことや日本の事をしっかりと知っておくととて

もいいと思います。

・ただモンゴルに来るといわけではないということを常に意識して欲しい。いつも目的と好奇心を持ってモンゴルでの生活をして欲しいです。

・私はモンゴルへ来る前、ワクワクよりも不安の方が大きかったけれど、モンゴルは思っていたより住みやすくそして日本では味わえないものを手に入れることができます。ぜひ、モンゴルを楽しんで私たちがしてきたことを引き継いでくれるとうれしいです。

(文責 山田 孝)



(ダシンチレン村近郊の遺跡見学)



(日本大使館表での研修)



(ウランバートル郊外にある日本人墓地訪問)



(JICAモンゴル事務所での研修)

第3節 米国ノースカロライナ州の高等学校との交流

平成24(2012)年度に始まったアメリカ合衆国ノースカロライナ(NC)州訪問も今回で3回目となった。参加者は生徒10名(高1男4名、高1女3名、高2女3名)と引率教諭3名で、3月14日(土)~22日(日)の9日間の日程で行われた。今冬のNCは厳寒と豪雪で授業が休講になることがしばしばあり、その補講が3月21日(土)に組み込まれたため、生徒たちは3月16日(月)から6日連続で授業を受けることになった。

生徒はホームステイ先の高校生が通う学校に配属された。毎日の日本語の授業は午前Chapel Hill High Schoolで、午後East Chapel Hill High Schoolで行われ、我々引率教諭はレンタカーで移動して参観した。なお、レンタカーでの移動は今回が初めてであったが、移動の自由度が増すだけでなく、現地でお世話いただく日本人の方々の負担を減らす効果もあった。

(授業について)

NCの両校の日本語の授業は、とも青柳好美先生が担当されていた。青柳先生の授業は、PCを用いずことばだけで主張を伝える「スピーチ」と、調べたことをPCによる画像を利用して発表する「プレゼンテーション」



写真1

の2本立てになっていた。スピーチについてはNCの高校生は日本語で行うのだが、我々の訪問までの授業で準備ができていて、現地の授業では本校生徒の英語でのスピーチについて意見交換やらアドバイスやらが専ら行われた(写真1)。

授業4日目にあたる3月19日(木)にスピーチ大会が開かれた。午前中にはChapel Hill High SchoolにおいてNCの高校生の日本語スピーチが、現地在住の日本人を審査員にして行われ、夕刻にEast Chapel Hill High Schoolにおいて本校生徒の英語スピーチが、ホストファミリーの方をお招きし、食事をとりながら行われた(写真2、3)。スピーチテーマ例は以下のとおりである。

- ・日本 和菓子、動物、鉄道、青色LED、サイエンス、エヴァンゲリオン、フルーツを小学生に教える
- ・米国 精神病、特別支援、カンボジア、本田圭佑、ばら戦争と戦国時代、大学スポーツ選手の単位免除

米国の生徒のスピーチは、童話の日本語訳をそのまま読み上げるだけのもいくつかあったが、上記のようなしっかりとしたテーマを深く掘り下げて日本語で語るといふハイレベルなものもあり、感心させられた。



写真2



写真3

スピーチ大会が終わって残りの2日でプレゼンテーションに取り組んだ。米国の生徒はここまでの授業でプレゼンテーション用のスライドや日本語原稿を完成していたので、写真4のように自宅にホームステイさせている本校生徒の英語発表の援助をした。あらかじめ出発の数週間前から準備をしておいたのだが、ここでの援助が大いに役に立ったようである。そして、最終日には各授業時において、日米双方の全員がPCを利用してプレゼンテーションを行った(写真5)。本校の生徒が日本のアニメや鉄道など自国の優れた面を紹介したことが多かったのに対し、NCの高校生は自国ではなくおもに日本の行事や伝統食について触れていたことが対照的であった。



写真4



写真5

(助言者訪問)

現地での事前の日程調整では、名古屋大学海外米国事務所(NU-TECH)の神山知久所長はじめ、職員の方々に大変お世話になった。また、SGH校として実施することになっている課題研究の第三者評価委員として、NCの教職関係者の方が数名リストアップされているの

で、これらの方々にも実際にお目にかかって協力をお願いした。

- ・コリン・バットン氏 (チャタム郡教育長)
- ・サイモン・パートナー氏 (デューク大学教授)
- ・フィリップ・スミス氏
(ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)
- ・アイリーン・タリー氏
(イーストチャペルヒル高校長)

今回のNC訪問はSGH申請を済ませ、採択結果発表を間近に控えた中で行われた。SGH校になればNCの高校は本校の北米拠点校となり、SGH研究開発の以下の仮説を実現することを意識する必要がある。

現地の高校生や教育機関、公的機関、企業とネットワークを形成し、課題発見・課題解決型のプロジェクトを協同で行う。相手と話し合っ合意形成する過程で、相手国の言語や文化に関する知識や日本文化に関する理解を深めることができる。また、実践的に英語で議論することにより英語力が向上し、課題であった、英語で論理的に議論する力と効果的なプレゼンテーション能力が身につく。

しかし、実際にはこのような段階には到達できておらず、青柳先生の御指導のもとでスピーチとプレゼンテーションの初歩を学ぶにとどまった。SGH校に採択された今、上記の仮説実現に向けて事前学習の徹底や、条件整備等が必要となってくるものと思われる。

(文責 佐藤俊樹)